

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 「わかる」文学批評の達人

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 健誠, NISHIKAWA, Kensei メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2391">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2391</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 「わかる」文学批評の達人

西川 健誠

2001年の12月、正式着任の前の身体検査のために神戸を訪れた折、研究室を伺ったのが御輿先生との初対面であった。文学の研究・教育に対する熱い思いを語られる先生を前に、教養英語は8年ばかり教えていても英文学を教えるのは全くの未経験だった私は、思わず身が引き締まるのを感じた。

翌年4月に実際に着任し、私は英詩の授業を持たせていただいたが、程なく、授業の終わりに学生さんに出させるコメントに度々、「御輿先生の授業のようでなくてつまらない」という文言が現れるのに気付いた。英文学史での御輿先生での詩の解説と、私の解説とを比較してのコメントだったので。シェイクスピアとかダンとかヘリックとか、本来なら近代初期の詩が専門の私が得意とすべき詩人について、モダニスト小説がご専門の御輿先生の解説の方が面白いと書かれ、少々エゴの傷ついた私は、一体御輿先生はどんな授業をなさっているのか、と思ったものだ。そこで『英文学史』の授業を聴講させて下さいませんか」とお願いしてみた所、先生は笑顔で、しかし言下に「企業秘密が漏れるのでダメ！」と仰った。その後最終講義を除けば、外大での先生の講義をお聞きする事がないまま、今日に至ってしまった。

だが、先生の文学批評の魅力の源がどこにあるか、さらに学生さんからの話を聞くにつれ、また、特に学生さん達と一緒に先生のお部屋へ伺う機会が増えるにつれ、わかってきた。先生は学生の水準に、また教員でも私のような浅学菲才な者にはその水準に合わせ、話が出来ると。特に理論や理論につきもののジャーゴンを振り回す事を、先生は努めて避けられていたように思う。ここで若干問題発言をさせていただくと、文学研究の面白さが昨今の学生に伝わらない理由の一つは、御輿先生と同世代の学者の多くが初学者を放っばらかしにし、最新かもしれないが仲間内にしか通じぬ概念・用語を使っている研究に走ったからだ、と私は睨んでいるのだが、御輿先生は、理論の限界一少なくとも教育上の有用性に関わる限界一をよく心得られていた。先生の文学批評は、作品の言葉の持つ肌触りをご自分の感性をフルに働かせな

から説き明かす所に妙味があるのだが、学生さんにもまずはその学生さんの感性のレベルで作品の言葉と向き合うよう、指導されていたのではないかと。毎年、何本か御輿先生の卒論の副査をさせていただいたが、書き方が大人なもの、幼いもの、色々であっても、とにかく作品と向き合っている実感がどの卒論からも伝わってきた。これは学生さんの感性のレベルにまで下りての先生の指導の成果であろう。

少々本学の自慢になるけれど、神戸外大の英米文学文化の教員の間には、儀礼ではなく本気で、文学作品について、また互いの文学作品の批評について、議論する空気がある。こういう空気を率先して体現されていたのが御輿先生だった。どの年の院生発表会だったか、ヘンリー・ジェイムズのある中編小説の解釈をめぐり、学生の発表に対し御輿先生が滔滔と反論を述べられた。その院生は勿論、指導教官の先生また他の先生幾人には異論もあり、(これまた外大的に) 臆する事なくその異論を述べられたのだが、ご自身たちも相当の論客と思われたこれら先生方の異論をものともせず、さらに御輿先生が熱弁を奮い反論、一同うーんと唸ってしまった事を覚えている。御輿先生は主な英米文学作品の全てにつき鉄壁の解釈を持っているのでは、という感想を別の院生が漏らしたが、その時は私も同感であった。

他方、先生は納得がいく反論を容れるのに吝かではなかったし、また、僕を論破してごらん、と、私たちの側を挑発していたとも思う。私たち同僚や院生にとり、研究会や読書会が、しばしば先生の解釈に圧倒される場であると分かっているにもかかわらずにはおれなかったのは、そのために違いない。また、本学としては異例の事ながら、先生へのフェストシュリフト(『言葉という謎—英米文学・文化のアポリア』)の出版に賛成して下さり、先生自身も力のこもったウルフ論を寄せて下さったのも、文学について心ゆくまで語り、書く機会を私たちに与えるためであった。

「異様な緊張や屈折をはらむに至った『言葉』の姿に、率直に驚き茫然とさせられた経験を、何度も心の中で反芻し忘れずにいることが、真の豊かな批評の礎になりうる」と、御輿先生は上述の『言葉という謎—英米文学・文化のアポリア』の前書きに記されている。この礎に基づいた批評の教室での実践は、定年という事で残念ながら一区切りとはなるけれども、先生には是非とも引き続き、読む者・聞く者に伝わる、それでいて作品の言葉と粘り強く向き合う、文学批評を続けていただきたい。退官後の先生の *reading and writing life* が、この上なく幸せなものになる事を、心から願っている。